四家詩源流私考

吉田元定

一、四家詩

漢代詩經學界に於ける最も注目すべき現象として、四家詩の對立が數へられる。卽ち其の傳流に依つて、魯詩・齊詩・韓詩・毛詩の四家に分たれる詩家がそれである。史記儒林傳に據れば、

及今上卽位、趙綰・王臧之屬、明儒學而上亦鄉之。於是招方正賢良文學之士。自是之後、言詩、於魯則申培公、於齊則轅固生、於燕則韓太傅。

と、今上卽ち武帝の時の、魯・齊・韓三家の對立を擧げ、更に又漢書儒林傳には、

毛公趙人也。治詩爲河間獻王博士。

と毛公の名が見えてゐる。然るに漢書藝文志には、

凡詩六家四百一十六卷

と六家詩を數へてゐる。併し其の目に就いて見るに、

詩經二十八卷、魯齊韓三家。魯故二十五卷、魯說二十八卷。齊后氏故二十卷。齊孫氏故二十七卷。齊后氏傳三十九卷。齊孫氏傳二十八卷。齊雜記十八卷。韓故三十六卷。韓內傳四卷。韓外傳六卷。韓說四十一卷。毛詩二十九卷。毛詩故訓傳三十卷。

とあり、之は齊詩中の后氏（恐らく后蒼であらう）學及び孫氏學を數へた結果の如くである。併しながら之等は何れも齊詩中の分派であつて、恰も魯詩中に韋氏學、許氏學、齊詩中に翼氏師伏學、韓詩に王食長孫學が分立してゐるのと同樣と見做すべきで、詩說としては依然四家と見るべきであらう。

而して後漢書儒林傳に據れば、

前書、魯人申公受詩於浮丘伯、爲詁訓傳。是爲魯詩。齊人轅固生亦傳詩。是爲齊詩。燕人韓嘉亦傳詩。是爲韓詩。三家皆立博士。趙人毛萇傳詩。是爲毛詩。未得立。

とあり、四家詩の名を得たのは夫々申培公・轅固生・韓嘉・毛萇である。尤も毛詩詁訓傳の撰者については、毛萇に對し毛亨說が一般に採用されてをり、此の意味から言へば毛詩の濫觴は毛亨と見て差支なからう。但し詁訓傳の撰者を毛亨とするも、毛傳には後述する如く、後世改訂の跡が多く發見出來るのである。然し何れにするも四家詩が此の申培・轅固生・韓嘉・毛亨の四人から始まつたものと認めてよからう。

之に對し、四家詩の源流を更に古に溯らしめる說がある。陸璣の說及び陸德明の說が是である。陸璣說に據れば、毛詩草木蟲魚疏に、毛詩の傳來を敍して、

孔子刪詩授卜商。商爲之序、以授魯人曾申。申授魏人李克。克授魯人孟仲子。孟仲子授根牟子。根牟子授趙人荀卿。

と、毛詩の系統を荀子より遡溯して、孔子子夏に歸せしめてゐる。又陸德明の說に據れば、經典釋文叙錄に、

毛詩者出自毛公。河間獻王好之。徐整云、子夏授高行子、高行子授薛倉子、薛倉子授帛妙子、帛妙子授河間人大毛公。毛公爲詩故訓傳於家、以授趙人小毛公。

と、徐整の說を引いて、毛詩の源流を同じく子夏に迄溯らしめ、更に一說として陸璣の說を引いてゐる。何れにするも毛詩を子夏に溯源せしむる點に於て相違はない。

然るに陳喬樅は陸璣說及び釋文敍錄所載の一說を以て魯詩なりと論じて曰く、

序錄所紀一云者、卽陸璣草木疏之說。陸德明意、似以徐整爲正。整亦吳太常卿、與陸璣同時先後者。璣以大毛公爲受自荀卿、於古傳記、無所徵證。而申公魯詩傳自浮丘伯、爲荀卿再傳弟子、具載於漢書、章章可攷。則陸璣所紀、子夏傳曾申、云云、當爲魯詩授受源流、確然無疑。書缺有間篇簡斷佚失次。後人遂以此節屬之毛詩耳。……(魯詩遺說攷敍錄)

かくて彼は子夏曾申、荀子を經る傳授を魯詩の學統となし、從つて魯詩の源流を同じく荀子より子夏に溯らしめ、毛詩の源流を大毛公、帛妙子を經て子夏に溯らしめるのである。此の陳喬樅の說が我田引水的獨斷說である事は會〻前號に於て、故島田先生の御遺稿の中に拜見する如くであるから略に從ふ。且又陸璣の說にするも、陸德明の說にするも、儒學一流の尙古思想のあらはれであつて、其の學統の如き、固より遽に信を置くには足りないと思はれる。而して玆に又朱彝尊は別の立場から、四家詩が必ずしも前述の四人に始らぬ事を論じて曰く、

定之方中注、沖梁子曰、初楚宮。正義鄭志張逸問、沖梁子何時人。答曰先師。魯人。當六國時。在毛公前。又維天之命注、孟仲子曰、大哉天命之無極、而美周之禮也。趙岐云、孟仲子孟子之從昆弟、從學孟子者。則魯之說詩、不始於浮丘伯。絲衣序、高子曰靈星之尸也。趙岐注孟子以爲齊人。則齊之說詩者、不始于轅固生也。(經義攷)

然しながら魯詩・齊詩といふは、必ずしも魯人齊人といふ嚴重なる標準に依據せる分類ではなく、魯及び齊を中心として行はれた詩說と見るべきで、例へば荀子は元來趙人、浮丘伯は元來齊人であるが、之が魯人申公に傳へられて魯を中心として專ら行はれて魯詩となり、又同じく魯人大毛公の詩說が毛詩となつてゐるのである。魯人の言必ずしも魯詩ならず、齊人の言必ずしも齊詩ならざる證であらう。

二、四家詩分立の濫觴

而して前述の諸說、卽ち源を遙か古に溯らせる觀方は要するに儒敎一般の傾向たる尙古思想と、更に漢代の嚴密なる師法家法の概念を以て律した點に誤謬が存するものと思ふ。

一方事實的に呂氏春秋の中の詩說にも明らかに各家の詩說を包含してゐる事も認められるし、又後述する如く更に溯

つて荀子の詩說中にも、殊に魯韓毛三家の詩說を包含してゐるのであつて、恐らく秦代迄は少くとも四家の詩は未分立の狀態に在つて傳へられたのであらうといふ事が想像される。從つて四家詩の分立對立は恐らく秦の焚書禁學に始まると思はれる。卽ち始皇の三十四年丞相李斯の建言によつて所謂焚書が行はれ、當時旣に政敎の具として認められた詩經が、其の筆頭に數へられて、秦代主流文化の埒外に置かれた事は、史記始皇本紀の明示する所である。併し此の事は、却つて一面に於て、博士官學への反抗となつて、詩書の潛匿・私學の潛行となり、延いては漢代師法家法の源となり、官學私學の並行、更に今文古文の華々しい論爭を展開すべき豐饒なる溫床を養ひつゝあつた事は、疑ふべくもない事實であらう。漢書楚元王傳に、

楚元王交、……少時嘗與魯穆生・白生・申公、俱受詩於浮丘伯。伯者孫卿門人也。及秦焚書、各別去。……

と云ひ、又史記儒林傳に、

申公、魯人也。高祖過魯、申公以弟子從師、入見高祖于魯南宮。

とあり、秦代申公が私學に依つて、竊に詩の傳授を行つてゐた事を知る事が出來るのである。其の外、史記儒林傳に、

天下竝爭於戰國、儒術旣絀焉。然齊魯之閒、學者獨不廢也。及至秦之季世、焚詩書、阬術士、六藝從此缺焉。陳涉之王也、而魯諸儒、持孔氏之禮器、往歸陳王。於是孔甲爲陳涉博士、卒與涉俱死。……然而縉紳先生之徒、負孔氏禮器往委質爲臣者、何也。以秦焚其業、積怨而發憤于陳王也。

と云ひ、或は又

及高皇帝誅項籍、擧兵圍魯、魯中諸儒、尙講習禮樂、弦歌之音不絕。豈非聖人之遺化、好禮樂之國哉。……夫齊・魯之閒、於文學、自古以來其天性也。

とあるなど、始皇の焚書禁學、官學統制に對する反抗として、殊に齊魯閒に於て、私學が潛行せられてゐた實情を想像して誤ないであらう。之等から類推すれば、申公と略、同時の毛亨・韓嬰・轅固生等の所謂各詩家の私授も恐らく此の

頃から行はれたのであらうと思はれる。官學の壓迫を避けて、僻居隱遁の間、秘かに授受される限り、それ等私學の間に、交渉融合の機會が少く、玆に各家學、各師說が簇立し、師法・家法尊重の氣運が釀成せられ更にそれが漢の五經博士立學に際して、今文詩三家が最も早く、其の官學界に乘出し、勢其の獨自性を主張する爲に、一方又當時未だ私學であつた毛詩は官學界に立たんが爲に、其の優秀性を誇示・主張せんとし、かくて眞の意味の四家詩の分立・對立は依然漢初に在ると信ずるのである。

三、疑問の提出

果して然らば、四家詩は漢初に於て、分立し、魯詩・齊詩は其の國名に取り、毛詩・韓詩は其の人名に取つたのである。此の命名は、固より偶然の結果なりとも見られるのであるが、私は其處に、或種の疑問と示唆とを提出してゐるのではなからうかと竊に思ふのである。其の示唆とは何ぞ。卽ち

齊・魯二家詩こそ四家詩の二大源流であり、韓詩・毛詩は魯詩の支流若くは改訂ではなからうか。

といふ臆斷が是である。之は今文三家詩が既に亡んでしまつた今日、極く僅かの拾遺資料に據つて推論するのであるから、極めて危險且つ大膽な試論には相違ないが、以下些か私見を述べて、此の結論を導きたいと思ふ。

四、魯學・齊學

先づ第一に、一般的狀勢から地理的に統觀し見るに、始皇の焚書・禁學に對抗し、儒學の私授が最も盛に行はれたのは、前述の如く、齊・魯兩國であり、既に引用せる「夫齊・魯之間於文學、自古以來、其天性也。」なる語と言ひ、又「天下竝爭於戰國、儒術既絀焉。然齊魯之間、學者獨不廢也。」なる語と言ひ、齊魯兩國が當時學術の二大中心であつた事を明らかに物語つてゐるのである。

次に之を時代的に統觀して見るに、史記・漢書に據れば、古文出現以前の前漢の經學界は、武帝以前に於ては、穀梁春秋は明らかに申公から瑕丘江公に傳つて孫に至つて博士に立ち、魯詩又固より申公に始まり、瑕丘江公より韋賢・韋

玄成に傳はつて韋氏之學となり、又一方許生及び徐公より王式を經て後、張唐褚氏之學、或は許氏之學となり、其の同流の學者は何れも博士となつて、其の繁盛を誇つてゐる。尙禮學の系統は極めて不明瞭であるが、後に論述する如く、矢張荀子と密接な關係を持つものの如く、かくて、前漢武帝以前の經學は、大體申公、更に荀子から出發し魯人によつて繼承され、所謂魯學が其の主流であつた。之に對し、武帝以後の經學の代表は、田何の易を始め、伏生の尙書にせよ、胡母生・董仲舒の公羊春秋にせよ、孟卿后蒼の禮學にもせよ、轅固生の齊詩にもせよ、何れも互に密接な關係をも見出し得、且つ田何・胡母生・轅固生が何れも齊人である事から考へて、齊學が當時の主流をなしてをり、武帝以前の經學が皆魯人申公に源を發してゐるのに對し、全く系統を異にしてゐる事に氣附くのである。卽ち前漢の經學界は大體此の二色彩に塗りつぶされてゐると言つてよからう。然るに韓詩の祖韓嬰は申公と共に早く博士になつて官學に立てられてゐながら、其の傳流も再傳以後は不明であり、寧ろ常に主流の外に置かれてゐたものの如くである。

五、荀子とも關聯

次に荀子との關係に於て考察して見ると、先づ魯詩は漢書儒林傳に

申公魯人也。少與楚元王、俱事齊人浮邱伯受詩。

とあり、更に同書楚元王傳に

楚元王交……少時嘗與魯穆生・白生・申公、俱受詩於浮邱伯。伯者孫卿門人也（前出）

と言つてゐるから、申公は實に荀子再傳の弟子である。鹽鐵論毀學篇にも、

李斯與包丘子俱事荀卿。……包丘子不免於甕牖蒿廬。

新語資質篇にも、

鮑丘之德行、非不高於李斯趙高。……

とあり、「包丘」「鮑丘」「浮邱」は同音相通じて、同人であらう。「浮」「包」相通の例は、春秋隱公八年左傳の經文に

「浮來」とあり、之を穀梁の經文に「包來」と記してあるのが是であり、「浮」「匏」相通の例は、禮記投壺篇に「如是者浮」。とあり、鄭注に、「浮或作匏」とあるが如き、それを想像させる。從つて浮邱伯は李斯と共に、荀子に承けて、之を申公に傳へたといふ事は信じてよからう。然る時、魯詩が荀子に淵源する事は固より明である。

韓詩に就いては、學統上から荀子との關係を認める事は出來ないが、現存の韓詩外傳が、藝文志に所載のそのまゝのものでないにしても、其の中に荀子の所說を其の儘取り、由つて以て詩を說いてゐる所が四十四ヶ所の多きに上つてゐる。今其の中の一例を取つて見ると、韓詩外傳一に、

君子有辯善之度、以治氣養性、則身後彭祖。修身自强、則名配堯禹。宜於時則達、厄於窮則處、信禮者也。凡用心之術、由禮則理達、不由禮則悖亂。飲食衣服、動靜居處、由禮則和節、不由禮則墊陷生疾。容貌態度、進退趨步、由禮則雅、不由禮則夷固。故人無禮則不生、事無禮則不成、國無禮則不寧、王無禮則死亡無日矣。詩曰、人而無禮、胡不遄死。

とあり、荀子修身篇を見るに、

扁善之度、以治氣養生、則後彭祖、以修身自名、則配堯禹。宜於時通、利以處禮、禮信是也。凡用血氣志意知慮、由禮則治通、不由禮則勃（＝悖）亂提優（＝慢）。食飲衣服。居處動靜、由禮則和節、不由禮則觸陷生疾。容貌態度、進退趨行、由禮則雅、不由禮則夷固辟違、庸衆而野。故人無禮則不生、事無禮則不成、國家無禮則不寧。詩曰、禮儀卒度。笑語卒獲。此之謂也。

とあり、其の引用せる詩は違つてゐるが、其の語は全く同一である事が知られる。かかる例を外傳の中に四十有餘見附け得る事は、韓詩が少くとも荀卿の學を傳へたものである事を明示するものである。汪中が荀卿子通論に於て、

由是言之、韓詩荀卿子之別子也。

と道破せるのは此の意味を言ふのであらう。

毛詩に就いては既に陸璣及び陸德明の、毛詩の授受も荀卿より大毛公に至ると見る說がある所、其處に毛詩と荀子との關係を信じて可なるべく、殊に毛詩說と荀子中に於ける詩說と相合するものがかなり多數に上るのは、此の考を裏書するものであらう。今其の一例を擧げるならば、曹風「鳲鳩」の毛詩序に、

鳲鳩、刺不壹也。在位無君子。用心之不壹也。

とあり、之を他の詩說に見るに、易林「夬之家人」に

鳲鳩七子均而不殆。

とあり、陳喬樅は其の著齊詩遺說攷(一)に於て、易林が齊詩である事の證十ケ條をあげてゐる。之は、大體妥當であるから、右の易林の說は齊詩說と見てよからう。次に、魏志曹植傳に、

七子均養者、鳲鳩之仁也。

とある。曹植の詩說が他の數ケ所に於て、他の韓詩說と一致する所から考へて、之を韓詩說と見る陳喬樅（韓詩遺說攷(三)）に從つて、右の說は韓詩說と考へられる。然るに荀子には此の詩を引用して、

詩曰、鳲鳩在桑。其子七兮。淑人君子其儀一兮。。其儀一兮。心如結兮。故君子結於一也。（勸學篇）

とあり、毛詩說は最も之に近いやうに思はれる。尙一般に取上げられる尤も顯著な問題に、婚姻正時についての荀子・毛詩の一致がある。卽ち、陳風「東門之楊」の毛傳に、

男女失時、不逮秋冬。

とあり、白虎通嫁娶篇には、

嫁娶必以春何。春者天地交通、萬物始生。陰陽交接之時也。詩云、士如歸妻、迨冰未泮。

とあり、毛詩說と異る白虎觀會議には魏應が之を主宰し、魏應は後漢書儒林傳に據れば魯詩を習つたとあり、又白虎會議に招かれた學者の中には、魯恭等の魯詩學者が見えてをり、又事實、白虎通內の詩說が、他の魯詩說と合致する所が

多いから、右の白虎通の說は、大體陳喬樅（魯詩遺說攷自序）に從つて、魯詩說と見てよからう。次に易林を見るに、

冰將泮散、鳴雁雍雍。丁男長女、可以會同、生育賢人。

とあり、齊詩說も寧ろ毛詩と異つて、魯詩に近いやうに思はれる。然るに荀子大略篇には

霜降逆女、冰將泮殺止。內十日一御。

と言ひ、秋冬の期を以て、婚姻の正時と爲す點に於て、毛詩說と完全に一致する。而して此の條の毛詩正義には、荀子の語を引いて

毛公親事荀卿。故亦以秋冬爲婚期。

と言つてゐる。因に之は韓詩說にも一致するのであつて、王肅の聖證論に

韓詩傳曰、古者霜降迎女。冰泮殺止。（同條正義引）

とあり、之は荀子の語を其の儘襲用したものの如くである。尙俞樾も曲園襍纂「荀子詩說」に於て、荀卿毛詩說を唱へ其の詩說をすべて毛詩說に歸してゐる。羅光漢も、國粹學報「毛詩荀子相通攷」に於て其の相通例二十一ヶ條を擧げ、

由以上所言觀之、則荀義合于毛詩者、十之八九。蓋毛公受業荀卿之門。故能發明師說。

と結んでゐる。安井先生も、兩者の關係を認められて、其の證十一をあげてゐられる。（支那學及び斯文）。要するに毛詩が荀子と多大の關係を有する事は明らかである。

然るに齊詩は直接的には荀子との關聯を見出す事が出來ない。唯、大戴禮記中の、勸學・禮三本・哀公問五義三篇及び禮記中の、三年問・鄉飲酒義の文が明らかに荀卿に負ふ所が多い事は事實であり、謝墉は荀子箋釋序に於て之を論じてゐる。而して一方陳喬樅は禮及び禮注に齊詩の文多しとなして

禮大小戴氏之學、皆傳自后蒼。蒼治齊詩、以通詩禮爲博士、見漢書儒林傳。攷鄭君六藝論云、案漢書藝文志・儒林傳言、傳禮十三家。唯高堂生及五傳弟子名在也。禮記正義引熊氏曰、高堂生・蕭奮・孟卿・后倉・及戴德・戴聖・爲五

也。六藝論又云、今禮行於世者、戴德・戴聖之學也。戴德傳禮八十五篇、則大戴禮是也。戴聖傳禮四十九篇、則此禮記是也。詩禮淵源既同一師、則二戴禮記中、凡所引詩、皆當爲齊詩之文矣。鄭君此注與詩箋異、蓋禮家舊說、多主齊詩。故鄭君據以爲解也。（齊詩遺說攷一）

と。此の說に從へば、齊詩は間接的に結びつく。詩の系統に屬する后蒼が、同時に孟卿に從つて禮を治め、之を戴德・戴聖に傳へてゐるから、孟卿及び后蒼以後の禮學も亦齊詩と關係を生じた事は事實であらう。併しながら一方、漢書儒林傳の傳ふる所に據れば、漢初、士禮十七篇を傳へた高堂生は魯の人であり、又孝文の時、同じく魯の徐生が頌（禮容）を能くするを以て禮官大夫となり、其の子を經て、孫の延及び襄に至り、更に其の弟子に公戶滿意・栢生・單次出でて皆禮官大夫となり、瑕丘の蕭奮亦禮を以て淮陽の大守に成つて、禮家は皆徐氏に本づくと言はれ、而も徐生か申公の弟子で魯詩を傳へた徐公と似、蕭奮が同じく魯詩を傳へた江公と、鄉里瑕丘を同じくし、其の弟子孟卿亦嘗て荀子が赴任して且つ其の晩年を送つた蘭陵を鄉里とし、其の卿なる字も或は荀子に私淑せる結果なるやも知れず、從つて禮學の系統も孟卿迄は寧ろ却つて荀子申公系統の所謂魯學派に屬すると思惟せられるのである。且又漢書藝文志の傳ふる所に據れば、戴聖が禮記を編纂する時、既に禮の經及び記二百餘篇が存してゐたのであつて、其の取舍採擇が戴聖によつて爲され、必ずしも其の創作でないから、戴聖個人の師承系統が齊學と關聯する故を以て、原由的には寧ろ魯學に近い禮記中の詩說を齊詩說なりとするのは稍危險である。加之、陳喬樅の禮記引詩齊詩說と主張するのは、前掲の引用文にも見える如く、實は彼の禮記鄭注齊詩說の根據と爲さんが爲であるが、禮記中の引詩のみには、明らかに齊詩說なりと認められる說を發見するのは困難であり、禮注そのものでさへ、王應麟（困學紀聞、三詩）馮登府（三家詩異文疏證、韓詩信南山）胡承珙（毛詩後箋五）馬瑞辰（毛詩傳箋通釋一）魏源（詩古微七）其の他の韓詩說あり、又王鳴盛（蛾術篇五十、鄭康成說會、會通衆家、不拘一家）范家相（三家詩拾遺一）其の他の魯詩說あり、又事實的にも、其の中、必ずしも齊詩のみならず、韓詩・魯詩と認められ、又注中それを明言してゐる折がある。要するに、禮記・禮注齊詩說は極め

て不確實なる誹を免れない。

かくて、魯・韓・毛・三家詩が何れも直接的に荀子に淵源してゐる事は明白であるのに對し、齊詩は間接的にも其の點が詳でないと言ふ事が言はれる。

私は更に積極的に、齊詩が荀子と對蹠的な立場にあると思はれる根本的な問題を取上げたい。それは天に對する思想である。彼の態度は一言にして史記の

荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營於巫祝、信機祥、鄙儒小拘如莊周等、又猾稽亂俗……

なる文が說明してゐる。荀子に天論篇あり、全文すべて天に關する世俗の謬說迷信を排除して餘す所がない。今其の一例を擧げるならば、

星墜木鳴、國人皆恐曰、是何也。曰、無何也。是天地之變、陰陽之化、物之罕至者也。怪之可也。而畏之非也。夫日月之有蝕、風雨之不時、怪星之黨見、是無世而不常有之。上明而政平、則是雖並世起、無傷也。上闇而政險、則是雖無一至者、無益也。……

とあるのは是で、天然自然の法則に拘らず、人力を盡すべきを說き、更に

天行有常、不爲堯存、不爲桀亡。應之以治則吉、應之以亂則凶。彊本而節用則天不能貧。養備而動時則天不能疾。修(循)道而不貳則天不能禍。……本荒而用侈則天不能使之富。養略而動罕則天不能使之全。倍道而妄行則天不能使之吉。故水旱未至而飢渴、寒暑未薄而疾、祆怪未至而凶、受時與治世同、而殃禍與治世異、不可以怨天、其道然也。故明於天人之分則可謂至人矣。

と言つて天道と人道とを嚴に區別して之を戒めてゐる。然るに齊詩家翼奉の封事中に、其の師說を引いて、

臣聞之師、曰、天地設位、懸日月、布星辰、分陰陽、定四時、列五行、以視聖人、名之曰道。聖人見道、然後知王法之象、故畫州土、建君臣、立律歷、陳成敗、以視賢者、名之曰經。賢者見經、然後知人道之務、則詩・書・易・春

秋・禮・樂是也。易有陰陽、詩有五際、春秋有災異、皆列終始、推得失、攷天心、以言王道之安危。（漢書、翼奉傳）

と言つてをり、五經すべて天人相關の理を說いてゐると爲すのである。又翼奉と師を同じうする齊詩家匡衡にも、

臣聞、六經者、聖人所以統天地之心、著善惡之歸、明吉凶之分、通人道之正、不悖於其本性者也。故審六藝之指、則天人之理可得而知、草木昆蟲可得而育。此永永不易之道也。（漢書匡衡傳）

といふ說あり、かかる考へ方は、有名な董仲舒の賢良對策中に、王者の政が天意に叶ふか否かは、災異によつて知り得るものとして、所謂「天人相與の際を觀る」といふ態度と全く一致する。但し天人の關係を肯定し、卽ち人道を天道に由來するとなすのは支那民族の根本思想であり、神祕な勢力を信ずるのは漢人種一般の國民性であり、殊に戰國より秦漢に至る間、打續く戰亂による社會的不安は、漸次人民をして災異を畏れ、それに對する形而上的說明を求めずには措かしめなかつた。齊學を傳へた諸儒が此の時勢を看取して、巧みにそれを經學に附會せしめ、所謂漢代の通經致用の迚るべき一の途として、時代の齎らした一傾向とも見られるのであるが、齊を中心とする所謂齊學には特に此の傾向が著しく、例へば、伏生の尙書大傳中の洪範五行說、夏候勝の五行災異の說、公羊傳に見える災異說、京房易の災異說、等皆之であつて、かくの如き考へ方は、源に溯ると、荀子が「機祥を信ず」と非難した鄒衍の陰陽五行說から出發したものと思はれ、此の意味で魯を中心とする荀子門流の所謂魯學に對し、齊學經說の一大特色とも見られるのである。

要するに、魯・韓・毛三家詩が明らかに淵源する荀子の學が天人關係を否定するのに對し、齊詩は齊學として、殊に積極的に天人相關を肯定せんとする點に於て、根本的に荀子と對立し、寧ろ孟子の學の影響が多く見られるといふ事が出來る。而して韓詩家諸儒の傳に稍〻齊詩に近似せる思想があらはれてゐるのは、要するに時代が要求した致用の道であつて、齊詩の如き、根本的な且つ確乎たる思想でなかつたものの如くである。以上によつて、齊・魯二詩は、夫々齊學・魯學の一部門として、早くから對立してゐた二源流ではなからうかと思惟するのである。

六、韓詩と魯詩

次に韓詩と魯詩との關係を考へて見るのに、韓詩外傳の文が、魯詩の遠祖と目せられる荀子の文を多く引く事により間接的に魯詩との關係が認められる以外に、其の文が多く劉向の說苑・列女傳・新序等の文に一致する事により、直接的に魯詩と關聯する。何となれば、劉向詩說が大體魯詩說と見られるからである。但し劉向詩說の所屬に就いては古來から議論の存する所で、夙に王應麟は列女傳所引の芣苢・汝墳・行露・邶風柏舟・燕燕・式微・碩人・大車、及び新序所引の「二子乘舟」に於ける詩說が毛詩詩說と異る點に注目し劉向魯詩說を唱へ、詩攷後序に於て之を述べてゐる。然るに全祖望は大略魯詩說を肯定してゐながら、其の中には必ずしも魯詩說を墨守せずとなし、經史問答に於て、寧ろ齊詩說をも含んでゐるとなしてゐる。然るに王引之に至つて、列女傳中の「芣苢」の詩說が文選辨命論注所引の韓詩說に一致し、「汝墳」の詩說が後漢書周磐傳注所引の韓詩章句に一致し、「行露」の詩說が韓詩外傳に合し、「燕燕」の詩說が合禮記坊記鄭注と合し、又漢書劉向傳に見える災異に對する封事中所引の「十月之交」の詩中の文字が毛詩と異り、文選「爲完公求加贈劉前軍表」注所引の詩の文字と合致する事を例證として、劉向韓詩說を唱へ

然則向所述者乃韓詩也。（經義述聞、劉向述韓詩）

と結んでをり、馬瑞辰亦「毛詩傳箋通釋一」に於て、之に贊意を表してゐる。但し王引之は禮記鄭注を韓詩なりと見ての立論である。之に對し馮登府（三家詩異文疏證）。陳奐（鄭氏箋攷徵）。陳喬樅（魯詩遺說攷）。王先謙（詩三家義集疏）等は何れも再び劉向魯詩說を唱へてゐる。殊に陳喬樅は王引立の說を鋭く駁して、

攷楚元王傳、言、元王好詩、諸子皆讀詩。王子郢客與申公俱卒學。申公爲詩傳、元王亦次之詩傳、號元王詩。向爲元王子休侯當曾孫。漢人傳經、最重家學。知向世修其業。著說苑。新序・列女傳諸書、其所稱述、必出於魯詩無疑。（魯詩遺說攷自序）

と魯詩說を强調し、又事實劉向詩說が、他の魯詩說と認められるものに一致する所が多いから、之等三書は大體魯詩說と認めてよからう。果して然らば韓詩外傳の文が右の如く、魯詩と目せられる資料の文と一致する事は、それらが少く

とも同一の原據を本としてゐる事を思はせ、此處に魯詩と韓詩とは直接的に關聯する。而して此の關聯に立つて、劉向詩說を今一度ふり返つて見ると、王引之の說の根據とせる韓詩と劉向詩說との類似は、必ずしも怪しむに足りないものとならう。

以上に依つて、韓詩が魯詩の一分派であらうと想像するのである。

七、毛詩と魯詩

最後に毛詩と魯詩との關聯に就いて眺めて見よう。併し之は最も多くの問題を含んでゐる。それは、毛詩が古文であり、魯詩は今文であり、從來多く古文毛詩と今文三家詩との相異が論ぜられ、又事實其の間に最も多く詩說の相異が見出されるからである。併しそれにも拘らず、毛詩と魯詩との間には次の諸點で其の關聯が見出される。

Ⅰ既に述べた如く、毛詩が荀卿との關係に於て魯詩と共通の祖を有してゐること。

Ⅱ劉歆は劉向の子で、楚元王の後であり、其の家學から推せば當然魯詩家である。且又彼は漢書本傳による時は「信口說而背傳記。是末師而非往古。」と師法家法のない者を末師と斥け、師法家法の重んずべきを說いてゐる。從つて家學よりすれば當然魯詩家であり、又それを遵守すべき筈の彼が、一方に於て、漢書本傳の記する所に據れば、毛詩を重んじ、左氏春秋・逸禮・古文尙書と共に、之を學官に立てんとしてゐる。之は或は魯詩と毛詩との間に、或る關聯を聯想させるものではなからうか。而して彼の七略に取つたと言はれる漢書藝文志に三家詩を批判して、

或取春秋、采雜說、咸非其本義、與不得已。魯最爲近之。

と、中に魯詩の優秀性を稱してゐるのは、此の間の消息を語るものではなからうか。

Ⅲ蔡邕の「獨斷」に

清廟一章八句。洛邑旣成。諸侯朝見、宗祀文王之所歌也。

とあり、之は毛詩小序の

清廟祀文王也。周公既成洛邑、朝諸侯、率以祀文王焉

清廟一章八句

と略ゞ一致し、又獨斷は次の「維天之命」を說いて

維天之命、一章八句。告太平於文王之所歌也。

と言ひ、之は毛詩小序

維天之命、太平告文王也。

一章八句

なる文と全く一致する。而して單に此の篇のみに限らず、周頌三十一篇中、獨斷の說と毛詩小序とは全く一致する。而るに蔡邕は、蔡邕集蔡朗碑に、

以魯詩教授。

とあり、且つ其の著琴操並びに楊賜等と共に勅を受けて定めた熹平石經の殘碑が魯詩を主となし、稀に韓・齊の二字をあらはして、二家の異同を記してゐるから、蔡邕は明らかに魯詩家と目される。從つて獨斷の說は恐らく魯詩周頌の序であらう。果して然らば、周頌序に於て魯詩と毛詩とは全く一致するのである。

以上に依つて、毛詩と魯詩とが關聯すべき多くの可能性を有してゐると言はれる。

唯此處に一言觸れて置かねばならぬことは、事實的に提供される毛詩と魯詩との間の多くの詩說の相異點である。併し今其の根本的相異點を檢討して見ると、

I 三家詩との相異點として最も重視される國風の序に於て專ら道義的・政敎的解釋を與へてゐる。明らかに民情の流露した淫詩と目せられるものでも、毛詩に在つては、刺淫・刺惡といふ標題に鎧はれて、其の道義的・政敎的意義を高揚してゐる。勿論當時既に政敎の具に供せられた詩經に對する解釋であるから、かかる傾向は三家詩に在つても、蔽

ひがたいが、毛詩に在つては、寧ろ歪曲とも稱し得べき程度に改訂の行はれた跡が著しい。其の例は枚擧に遑がないが、例へば、召南「騶虞」は蔡邕の「琴操」に

騶虞者、邵國之女所作也。古者聖王在上、役不踰時、不失嘉會。內無怨女、外無曠夫。及周道衰微、禮義廢弛、强凌弱、衆暴寡、萬民騷勤、百姓愁苦、男怨於外、女傷於內、內外無主。內迫性情、外逼禮儀。欲傷所讒、而不逢時。於是援琴而歌。

とあり、蔡邕は魯詩家であるから、魯詩說は大體邵國の女の感傷となしてゐるのに對し、毛詩は之を文王の化に結びつけ、又鵲巢と體系的に連繫を强調し、其の召南末尾に在る意義を主張してゐる。卽ち毛序に

騶虞鵲巢之應也。鵲巢之化行、人倫旣正、朝廷旣治、天下純被文王之化。則庶類蕃殖、蒐田以時。仁如騶虞、則王道盛也。

と言ひ、毛傳は騶虞を解して、

義獸也。白虎黑文、不食生物。有至信之德、則應之。

と言つて、其の「文王之化」「王道」「義獸」を高唱してゐるのは、魯詩に比べて、其處に詩本來の義が、政敎的色彩を以て、改訂されてゐはしないかといふ疑をさへ生ぜしむるものである。其の外、陳風「東門之池」衞風「氓」等は眞に民情の流露した素朴的な歌謠である事は明らかであるのに、毛傳は依然之を「刺淫」「刺惡」の詩としてゐる。かかる點にも毛傳作爲の跡が見受けられるのである。

II 次に毛詩と他の三家詩と相異なる部分に於て、毛詩特有の尙古主義よりする改訂の跡が見えることで、前述の政敎的、換言すれば儒敎的色彩が之と結ぶのは、當然であつて、又後出の毛詩が、純粹の經學として其の優秀性を主張する爲、勢尙古主義的傾向を帶びてゐるのも亦寧ろ當然で、之等は毛詩が三家詩に比して、詩の內容の年代、或は其の傳授或は其の詩序の製作を多く古に溯らせてゐる事等に顯現してゐる。其の一例としてあげられるのは商頌の制作年代に關

する毛詩の作爲的傾向である。三家詩は之を以て宋の正考父の詩となすのに對し、（史記・薛君章句・禮記鄭注等）、毛詩は之を遠く殷の詩と爲してゐる。然るに近時、王國維は「觀堂集林、說商頌」に於て、其の內容の考察、殷墟卜辭との比較より、之が宋の詩である事を論斷してゐる。論極めて正鵠、商頌が殷の詩でない事は今日の常識である。果して然らば其處に毛詩の尙古的作爲の跡を認めなければならぬ。又其の傳の中に、孟仲子（周頌「維天之命」魯頌「閟宮」）沖梁子（鄘風「定之方中」）高子（周頌「絲衣」序）等の名あり、正義所引、鄭玄の詩譜に據る時は、孟仲子は子思の弟子で孟子と共に事へた人、仲梁子は六國の人である。又高子は恐らく孟子に見える高子であらう。かく六國の頃の先人の說を引いて其の說を尊敬づけてゐるのも其の特長であらう。玆で私が特に取上げたいと思ふのは學統及び詩序作者に關する毛詩の尙古的企圖である。漢書藝文志に據れば、當時三家詩が夫々其の祖を秦末・漢初の申公・轅固生・韓嬰に歸してゐるのに對し、毛詩は遠く祖を子夏に溯らしめて、其の傳經を價値づけてをり、又孔子刪詩、子夏作序といふ說も行はれてゐたものの如く、既に鄭玄もかく信じ、陸璣徐整の如き三國時代の人々にもかかる說のある事を考へれば、恐らく毛詩自體時代的古さを强調し標榜してゐたものであらう。漢書藝文志に

又有毛公之學。自謂、子夏所傳。

とあるのも、それを物語つてゐるものの如く、毛詩の尙古的企圖作爲が窺はれると思ふ。魏源は既に此の點を指摘してゐる。卽ち、

漢書曰、又有毛公之學、自言子夏所傳。自言云者人不敢信之詞也。……豈非漢書自言子夏所傳一語、已發其覆乎。（詩古微一、齊魯韓毛異同論上）

Ⅲ又各篇の解釋に體系的な整理を加へ、周南・召南は之を周公・召公に繫け、又大雅にもせよ、小雅にもせよ、其の美詩は大部分、之を周室創業の主、文王に繫け、一部分之を中興の主、宣王に繫け、其の刺詩の全部を幽王に繫けてゐる。しかも其の詩の排列が、文王・宣王・幽王と理路整然と組立てられ、却つて其處に毛詩の後世的な作爲が看取され

る。

Ⅳ大雅「生民」商頌「玄鳥」等に於ける三家詩說としてよく引かれる所謂感生帝說に對しても、毛詩は之に合理的な解釋を施してゐる。又周南「漢廣」の一篇に對しても、魯詩說と目せられる劉向の列女傳・列仙傳及び楚詞「九思」王逸注。文選「蜀都賦」「江賦」「七命」諸篇の李善注、及び太平御覽等夫々所引の韓詩內傳・外傳。齊詩說と目せられる易林等は何れも、神話的傳說を加へてゐるが、毛詩は之に同樣周公に關して、儒敎的合理的解釋を加へてゐる。之は勿論、儒敎の現實的功利的な合理主義から言へば、正流と稱すべきであらう。併し一方上古未開の時代に在つて、かかる神話的傳說の存在する事は、古今東西を問はず、固より當然の事で、寧ろそれこそ古代人の思想の原型に近いと言ふべきであらう。之を後世の科學的概念から一律に抹殺して、詩そのものに合理的解釋を求めるのは、傳說と史實との混亂であり、而して其の由つて來る所は、詩經に對する儒敎的合理主義適用の結果行はれた後の改訂ではなからうか。

以上の相異點から綜合して毛詩を觀ると、毛詩は古文として、後漢に至つて始めて學官に立てられたのであるから、勢、當時既成の官學に對抗して、其の位置を確保する爲には、之等と對抗し又は凌駕するに足る異說を立てて、自家の優秀性を示すべく、凡ゆる努力が拂はれたと想像してよからう。而して一方三家が皆早く學官に立てられて、毛詩の如く、爲にする改竄の必要も認めず、且つ官學として、其の改竄も輕々しく行ふを許されなかつた實狀の結果、其の初の姿を比較的原型に近く保存して來たと思はれるのに對し、毛詩は民間私學として自由な立場に在り、其の改竄も亦比較的容易であつたらうと想像されるのであらう。かくて毛詩が三家より有利な地步を獲得せんが爲の企圖が、其の周圍の有利な外的條件に掩護されて、一方には道義的、政敎的な改訂、となつて儒敎の經典としての優秀性を誇り、他方には合理的尙古的な傾向となつて其の尊嚴性を主張したものと思はれる。

從つて、毛詩と魯詩との相異は必ずしも本來からの平行せる異說ではなくして、寧ろ古文經傳としての對抗上より、後世よりした改訂ではなからうかと思はれる。其の經注が極めて整齊簡潔で、恰も尙書僞孔傳、論語何晏集解の體制を

聯想させるのも右の想像の一助となる。殊に、毛傳中に古文經籍就中周禮の採用と思はれる例が相當多數に上る事によつても裏書される。今王國維の說に據つて（觀堂集林別集後編、書毛詩故訓傳後）其の重要なるものを摘出して見ると

(イ)昏禮、純帛不過五兩（召南行露）——（地官媒氏）

(ロ)鳥隼曰旟。析羽爲旌。（鄘風干旄）
龜蛇曰旐。鳥隼曰旟。（小雅、出車）
日月爲常（小雅、六月）
鳥隼曰旟。龜蛇曰旐。（大雅桑柔）
——春官司常

(ハ)天子大夫四名。其出封五命。如子男之服。
服毳冕以決訟。（王風大車）
候伯之禮七命。冕服七章。
天子之卿六命。車旂衣服。以六爲節。（唐風無衣）（秦風終南）
——春官典命
春官司服

(ニ)黑與青、謂之黻。五色備、謂之繡。（秦風終南）
白與黑、謂之黼。（小雅采菽）
——冬官、畫績之事

(ホ)冬獻狼、夏獻麋、秋冬獻鹿豕羣獸。（秦風駟鐵）——（天官獸人）

(ヘ)大獸公之。小獸私之。（豳風七月）——（夏官大司馬）

(ト)嘗之日、涖卜來歲之芟。獮之日、涖卜來歲之戒。社之日、涖卜來歲之稼。（大雅生民）——（春官、肆師）

(チ)國有凶荒、則索鬼神而祭之。（大雅雲漢）——（地官大司徒）

(リ)諸侯六閑。馬四種。有良馬。有田馬。有戎馬。有駑馬。（魯頌駉）——（夏官校人）（夏官馬質）

以上は明らかに周禮の文を襲用してゐるが、此の外に明らかに周禮に據つたと思はれるものが、八ヶ條程ある。而し

て王國維は之等を結んで次の如く言つてゐる。

傳之專言典制義理者、則多用周官。周官一書得於河間。不獨漢初齊魯諸儒皆未之見、卽周秦人著書、亦未有徵引一二者。大毛公魯人。又親受詩於荀子、是生於周秦之間、何緣得見周官而引之。……雖左傳國語等古文之早出者、亦無一與周官相發明。惟毛詩傳言典制、合於周官者、其多如此。固足證其出於河間、而與周秦間之魯人大毛公、無與焉爾。

（觀堂集林別集後編）

卽ち毛詩傳の成立は、周秦の間に溯らしめる事は出來ぬと論じてゐる。之等から考へて、現存の毛詩が當初から現初の如く、魯詩と甚だしい相異を保ちつゝ成立したのでなく、寧ろ周禮其の他後出の經籍によつて、多くの改訂が加へられたといふ事を想像せしむる可能性は充分に存在するのである。

八、結　語

以上細說した論據を要約すると次の諸點に歸するであらう。

Ⅰ、秦末に於ける儒學の私授、及び漢初に於ける儒學流行の二大中心は齊魯兩國であつた事。

Ⅱ、魯・韓・毛三家が何れも荀子に淵源してゐる事が明白であるのに、齊詩は詳でない事。

Ⅲ、魯・韓・毛三家が明らかに淵源する荀子の學が、天人關係を否定するのに對し、齊詩は齊學として、殊に積極的に天人相關を肯定せんとする點に於て、根本的な立場の相異が見られること。（以上齊魯二源流論據）

Ⅳ、現存韓詩外傳の文には、劉向の說苑・列女傳・新序等の所謂魯詩の資料と合致するものが大部分で、且又荀子を引用せる所も極めて多く、魯詩の源流に比せられる荀子との關係が認められること。（以上韓詩が魯詩の支流たる論據）

Ⅴ、毛詩は古文、魯詩は今文でありながら、毛詩が荀子との關係に於て、魯詩と共通すること。

Ⅵ、劉向の子劉歆は其の家學から推せば、當然魯詩家であり、彼の七略に取つたと稱せられる漢書藝文志に於ても、三家詩中魯詩の優秀性を認めてをり、而も一方劉歆は毛詩を重んじて、他の古文學と共に之を學官に立てん事を建議し

てゐること。

Ⅶ、魯詩家蔡邕の「獨斷」に見える周頌の序は、すべて毛詩序と完全に一致すること。

Ⅷ、毛詩は古文として、後漢に至つて始めて學官に立つたのであるから、恐らく當時の官學に採つて、而も一方後出の古文經に依つて、之等と對立すべき異說を立てて、自家の優越性を示さんとする企圖が行はれたと、當然想像されること。

Ⅸ、之等の企圖が

(イ)、今文三家詩との相異點として、最も重視される國風の序に於て、政敎的な改訂となり。

(ロ)、源を古に溯らせて尊嚴性を主張し、

(ハ)、儒敎的な合理性を其の解釋に與へ、

(ニ)、各篇の解釋にも體系的な整理を加へ

(ホ)、古文經として禮、殊に周禮の文を引いて尊嚴性を附す。

といふ諸點に於て明らかに發見出來るのであつて、從つて實例的に提供される、毛詩說の相異は、必ずしも本來からの異說に非ず、古文經傳としての對抗上よりせる後の改訂ではないかと思はれること。

（以上、毛詩が魯詩より出でて魯詩の改訂たる論據）

以上の諸點に立つて、私は極めて大膽な試論ではあるが、「四家詩の原由は魯詩・齊詩であり、韓詩は魯詩の別派であり、毛詩は魯詩の改訂であらう。」と結論するのである。斯く見來れば、毛詩草木鳥獸疏引く所の、詩の學統が、魯詩の授受であり、毛詩のそれに非ずと爲す說も、劉向詩說が魯詩家にして韓詩說を含むと爲す疑問も當然消失すべきである然しながら以上は溯源的に其の原由を考察したのであつて、旣に分れて、各詩家を形成對立するに至れば、必然的に其の獨自性特異性が附與されて、詩說の相異が招來され、其處に四家として存續する依據と期待とが生ずるのであつて、其の分立は依然漢初以降に始まると思惟するのである。（完）